

學界展望

支那文學

工藤 篁

支那學とは支那の歴史及び諸般の文化を對象とし、文獻に徴し、遺物に稽へ、之を學術的に研究闡明するを目的とする學と定義せられるならば、斯學の領域は、支那の歴史・言語・文學・宗教・哲學其他諸般の學問に涉り、凡そ支那に於て古來發達し來れるあらゆる文化現象の綜合的研究が行はねばならない。かくの如き廣汎な領域をもつ學界の全面的展望を行ふは容易ならぬ業であるから、此處ではその一部門、即ち主として我國に於ける支那文學研究の概觀を行ふに止め、他は然るべき人に待ちたいと思ふ。

支那人は如何なる概念をもつて「文學」に對したであらうか。文とは語源的には、線を交錯して生ずる紋様の意で

あつたが、單純な線の交錯によつて生ずるもの——象形即ち文字の意となり、最後に文字をもつて綴られたるもの——文章とか文獻を意味するに至る。然し「文は衆字を合集して辭義を爲すこと文繡の如く然るなり」といふ時には、單に文章・文獻の意より一步進めて、修飾せられ美化せられた文辭の意味に解すべきである。論語に言ふ質・文の相関は文飾ある言辭の意であり、左傳に「言の文無きは行はれて遠からず……文辭に非されば功を爲さず」とある亦此の類である。

結局「文」には廣狹の二義が存する。一は文獻の意であり、一は修辭を用ひたる文獻、即ち表現の技巧を以て評價せられる文辭の謂である。

従つて「文學」とは、廣義には文獻に就いて學ぶこと、即ち學問の意であり、狹義には修辭學、更に進んでは經學・史學に對し、主として美的文辭の創造を指すことになる。

論語に德行・政治・言語に對して「文學」一門を立て、之に子游・子夏の名を配してゐるが、刑疏に「文章博學」と解せるが如く、廣義の文學の意であり、「行ひて餘力あれば則ち以て文を學べ」といふ時も亦同じい。然し此の「文」を解するに、馬融までは古の遺文即ち文獻としてゐるが、鄭玄になると「道藝」と解して、そろ／＼狹義の文學の方に解釋づけようとする傾向にあり、更に進んで德行を以て道德説となし、文を以て修辭を加へられた文章——延いては文藝の意とするならば、此處に道學の過信と文藝の蹂躪が始まり、文藝は長く道德の支配下に置かれることになる。儒教の勢力が強い時代ほど此の傾向が甚しく、儒學一尊であつた漢代に於ては、詩經や楚辭の如き文藝作品すら道德説を以て理解せられる。

然し六朝に於ては、異民族の侵入相繼ぎ、漢代的な儒教思想の動搖は、狹義の文學の概念を復活せしめた。宋の文帝の時に、儒學・玄學・史學・文學の四館が設けられ、昭明太子が文選の序に「經典や思想家の如きは立意を以て宗となし、能文を以て本と爲すのではない。歴史家の文は是非を褒貶し、異同を紀別する所のもので、之を文學的作品に比すれば同じくない。」と言ふを見れば、此の時代の文學觀は已に道德説の支配から脱却して、純文藝的作品を豫想してゐた筈である。

(註一) 易・繫辭傳「物相雜る、故に文と曰ふ。」説文「畫を錯するなり、文を交ふるに象る。」

(註二) 爾雅・釋名

(註三) 論語・雍也「質文に勝れば則ち野。文質に勝れば則ち史。文質彬彬として然る後君子なり。」

(註四) 襄公二十五年

(註五) 論語・先進

(註六) 論語・學而

二

唐代になつて古文復活運動が盛んになると、文學は再び儒教的な觀念の支配下に繋がれ、明・清に至るまで載道の具としか考へられなかつた。文學は道統を繼承するものとされて以來、宋代以後主として市民の間に戯曲・小説の如き口語文學が盛行しても、それは風教に害あるものとして、文學の領域には入れないことになつてゐた。但し戯曲の

方は音律を主とせる美的韻文なるが故に、漢文・唐詩・宋詞・元曲と並稱せられることはあつても、小説は口語の散文なるため、兒女の偷看するものにして、士大夫の堂に入るものではない。

要するに狹義の文學すら、その表現の技巧のみが問題となるだけで、表現せられるものについては、あまり深くは考へられてゐない。注意されても、道學的なもので充足して居れば満足とされ、作家の人生や社界に對する問題の解決を、文學によつて求めたものではなかつた。

阿片戦争以後、列強の侵略が盛んになると、儒教的なものは再び動搖して、西學の勃興を來す。Litterateur の概念が浸透して來ると、今まで排撃されてゐた口語系の作品にも高い評價が許されて來た。先づ曲學が眞摯な研究の對象となり、民國成立以後、胡適一派の文學革命の時代になると、正統派の作品は却つて封建的遺物として抹殺せられ、彼等の主張が國語文學の樹立を目的とせるものなりしが故に、國語即ち口語の作品が過大な評價を以て回顧され、水滸、紅樓夢の類は、寧ろ先秦古文の上位にあるものとされた。

日本に於ても、儒學が支配的な力をもつてゐた幕末までは、すべて儒教的文學觀に従つて作品の評價が行はれたが、維新以來支那思想が、社會の指導的役割を泰西の文物に譲つてからは、自然主義・人道主義の文學に大勢が嚮ひ、時代の風潮は未だ漢學的遺臭に沈溺せる學界にも、清新な學風を要望して、支那文學の研究は新しい第一頁を開くのである。

先般文化勳章を授けられた狩野博士の功績は大きい。文學の方面では今まで顧みられなかつた戯曲の價値を認め、水滸傳と支那戯曲、琵琶行を材料とした支那戯曲に就いて、元曲の由來と白仁甫の梧桐雨の三篇によつて、早くも曲學の門庭を開き、學界に未開拓の分野を指示された。狩野門下の青木博士等による戯曲史の研究、はたまた元人雜劇の語彙の蒐集と、却つて支那の學界を指導するが如き曲學の隆盛は、實に此處に胚胎するものである。

その二は大正元年より二年に渉る歐洲旅行によつて、Shinologieの歴史と現状を紹介されたことである。⁽¹⁾ Chavannes, Paul Pelliot, De Groot, Forke, Conrady, Ivanow, Alexief等の業績の注目すべきを教へ、Shinologieの方法が漢學的なものに代つて、學界の通念となる基を爲した。Shinologieの歴史と現状に就いての研究は、その後田中幸一郎・松本信廣・石田幹之助・石濱順太郎の諸氏によつて繼承せられてゐる。

博士の歐洲行きは、單に學問の方法を輸入されただけではない。その方法を自由に驅使するに足る資料をも將來された。即ちバリ・ロンドン・ベルリン・ペテルブルグ等で敦煌及び西陲地方から發見された漢代の木簡及び漢人の尺牘、六朝及び唐代の舊抄卷子本、及び古抄本の一部を抄録して歸り、特に敦煌文書の中に戯曲・小説史上の重大な資料が含まれてゐるのを逸早く指摘せられた。⁽²⁾ これより唐宋の口語文學の研究が盛になり、一時は學界の主流をなす觀があつた。

其他當時支那に於て發見せられたばかりの京本通俗小説・五代史平話の紹介を試み、話本研究なる新しい問題を提示する等、狩野博士が學界の指導者として果された業績は、實に大きい。

結局博士は、領域を擴大し、資料を呈示し、更にそれを處理する方法を示された。それも、問題のありかを示し、

それからは後進の努力に待つといふが如き、學界の指導者としては、得難い風格を備へた方であつたため、門下の俊秀は雜誌「支那學」を興し、日本のみならず支那の學界にまで、少からぬ貢獻をしてゐる。一方東京は遅れて「漢學界雜誌」を、東西の東方文化研究所はそれぞれの學報を出して今日に至つてゐる。

(註一) 藝文(二ノ五)、大阪朝日(明治四十三年一月ヨリ)、藝文(二ノ二・三)

(註二) 續狗尾錄(藝文五ノ二・三・十二)

(註三) 支那俗文學史研究ノ材料(藝文七ノ一・三)

四

敦煌出土文書が紹介されると支那學の全面に涉つて、非常な變動が起つた。所謂「敦煌文學」の研究状態を見る前に、文書發見の徑路を略述しなければならぬ。

十九世紀の中葉よりして、新疆が英・露兩國の政治的侵出の衝突場となつて以來、兩國によつて再度の探検・調査旅行が試みられ、往々流沙の中に埋没されたる古代の都市が發掘された。一八八九年庫車地方から梵文經典の斷片が現はれ、翌年 Captain H. Bower によつて購ひ歸られた。これが有名な Bower 貝葉で、梵文經典中最古の寫本であることが知られた。一八九九年のローマに於ける萬國東洋學大會の後、中亞の探検は益々盛になり、一九〇七年の Aurel, Stein と翌年 Paul Pelliot の敦煌・莫高窟の發見、それよりして、莫大な古文書の將來は、支那學界に數々の資料を提供した。兩人が入手した文獻は五世紀より十世紀に至るもので、今はパリ及びロンドンに藏されてゐる。

るのは人の知る所である。

此の中に文學史の資料も少からぬは、既に狩野博士によつて指摘せられたが、その後の研究により、變文五十四種、詩歌四十七種、雜文二〇種、計百廿一種が明かになつてゐる。

變文とは、佛教經典或は支那在來の民間故事を散文で敘し、次に三・五・七言の韻文を挿入し、音楽を伴ひつゝ、講唱される特殊な文體を言ふ。之は佛教が民間に浸潤してゆく弘法の爲の便宜的手段であり、中唐より晚唐・五代に涉り、寺廟の俗講、或は個人の齋會に盛んに行はれた。然し宋初に禁ぜられてより、遂に衰滅してしまつて、敦煌の莫高窟の開かれるまでは、全く未知のまゝであつた。變文の研究によつて、仁宗朝に始まるとされた「語り物」は、實は變文の演變なりし事が明かになり、寶卷・彈詞等の「語り物」は、變文の直系なることが確められた。變文を最初に紹介したのは羅振玉^(三)で、三種の佛曲を翻印し、日本に於ては岡崎博士がパリから、三種の變文を抄録して來られ、青木博士は之についての研究を發表し^(四)、其他注目すべき變文の研究に容肇祖の韓朋賦考^(五)、王重民の捉季布傳文、王陵^(六)變文、鹽谷博士の茶酒論に就いて等がある。また變文の講唱の狀況を明かにした孫楷第の唐代俗講之科範與體裁^(七)は、覺明の唐代俗講考^(八)が唐代に俗講の行はれしを考證せるのみでありし後を繼いで、俗講の體例、門類、及び後代の散樂雜伎への展開を論じた力作である。

(註一) 佛祖統紀三九引釋門正統。

(註二) 敦煌零拾。

(註三) 敦煌遺書目連緣起・大目乾連冥間救母變文及び降魔變押座文に就て(支那學四ノ三)

支那文學

一橋論叢 第十三卷 第五號

- (註四) 蔡元培慶祝論文集(下)
- (註五) 國立北平圖書館刊(十ノ一・六)
- (註六) 漢學會雜誌(二ノ二)
- (註七) 國學季刊(六ノ二)
- (註八) 燕京學報(十六期)

五

P. K. Kozloff の西夏・黑水故城の發掘は、西夏學の發達に少なからぬ貢獻をなした。狩野博士が出土文獻の中に、僅か一點ではあるが、口語文學の資料が混じてゐるのを見出し、やがて Nevsky, Alexief より寄贈された影片について、青木博士の劉知遠諸宮調考^(二)が出た。抑々諸宮調なるものは、元人雜劇の源流を爲すもので、僅かに董解元西廂記一本、天寶遺事諸宮調佚文の二者が知られてゐるにすぎなかつた。

青木博士は曲牌及び體例の比較を試み、董西廂に先行するものであるとなし、用韻の上よりしても、宋詞の押韻例に近く、遂に正確な成立の年代は確かめ得なかつたが、戲曲史の第一頁に位置するものであることは疑ひなく、また劉知遠説話の逸早き作品化としても、珍重すべきを明かにした。

かうして諸宮調の研究が開かれると、鄭振鐸は「唐宋大曲考^(三)」に於て大曲より諸宮調に至る樂曲の形式と、諸宮調の流行が豫想外に甚しかつたことを指摘し、竹田復氏は「文學史上に於ける劉知遠の地位^(四)」に於て、劉知遠は北方系

の雜劇よりも、寧ろ南方系の戲文と非常に親密な關係にあり、汴京に盛行した諸宮調は、宋室の南渡に従つて臨安に移り、南宋戲文の發達を促せるものと考へ、最近吉川幸次郎氏は宋元の隨筆類を涉獵して、諸宮調盛行の狀況を彷彿せしむべくつとめられてゐる。

(註一) 支那學 (六ノ二)

(註二) 文學年報。

(註三) 漢學會雜誌 (六ノ二)

(註四) 諸宮調瑣談 (支那學十一ノ二)

六

敦煌が唐代以前の文獻を傳へし、尨大な書庫であるとすれば、我國は支那に亡びた古物を今に存する點では、寧ろ敦煌以上の貢獻を爲してゐる。足利・金澤の文庫は言ふまでもないが、江戸幕府以來搜集された漢籍は、内閣文庫に傳へられ、宋元の舊槧は固よりのこと、清初の禁令によつて傳來を失つた戲曲・小説も數多の古本を存し、鹽谷博士・長澤規矩也・辛島曉氏等の調査によつて、古今小説・醒世恒言・清平山堂話本等が學界に紹介され、多大の反響を捲起した。前者によつて今古奇觀の如き話本選集の前に所謂三言、古今小説 (喻世明言)・警世通言・醒世恒言の存在が明かになり、古今小説は内閣藏本と尊經閣本が、通言其他は大連の滿鐵圖書館、尾州家の蓬左文庫其他にあることが次々に發見され、三言二拍の研究は中世小説史の大きな課題となつた。其他少し前に出た京本通俗小説、及び清平

山堂話本、やゝ遅れて馬廉の翻印により紹介された雨窓欹枕集等によつて、話本の歴史は萬曆以前にまで溯り得ることになり、宋元の舊本の面影も推察することが出来て、今日では話本集の大體の源流と、その系統はたどられてゐる。^(三)
 内閣藏本・清平山堂の發見とその紹介は、長澤氏の學歴を飾るものであり、京本通俗小説と、清平山堂話本の關係を述べたものは支那にも翻譯され、最近では宋人話本八種の導引になつてゐる。

内閣文庫藏小説のもう一つの資料は、全相平話である。珍しく挿圖のある元代刻本で、それが五種も出たことは特筆すべきことであつた。その中に三國志の古い形が含まれて居り、宋代以後の講史の系統では、前出の五代史平話、宣和遺事と並んで重要な資料を揃へてくれた。鹽谷博士によつて翻譯され、更に紹介が試みられて居る。^(四)

以上の様に、我國は支那に亡びた口語文學史料を數多く存する爲に、孫楷第が中國大辭典編纂處の命によつて渡日し、中國通俗小説書目に續く、日本東京及大連圖書館所見中國小説書目提要八卷を出してゐる。戯曲方面も甚だ多いが、此方面は小説に遅れて注意され、長澤規矩也、傳藝子の書誌的研究があり、一應の整理が終了した。

(註一) 明ノ小説三言ニツイテ (斯文八ノ五・六・七)

(註二) 辛島曉 警世通言 (斯文九ノ一)

(註三) 孫楷第・三言二拍源流考

(註四) 鄭振鐸明清二代の平話集 (中國文學論集)

(註五) 京本通俗小説と清平山堂 (東洋學報十七ノ二、小説月報二〇ノ六)

(註六) 全相平話三國志に就て (狩野教授還曆記念 支那學論叢)

(註七) 元明兩朝に於ける戯曲小説の書誌學的考察 (漢學會雜誌四ノ二)

七

支那は戰亂相次ぎ特に歴代の禁書政策によつて、大部分の資料を失つてゐるが、時には珍籍の人間に出ないこともない。小説の方では前述せる京本通俗小説が、藝風堂老人・繆荃孫により上海の寓居に於て發見され、影元人寫本と銘打つて翻刻され、ついで「過子穢褻未敢傳摹」として未刊の、金主亮荒淫の一篇が、葉德輝により影宋本、或は宋本と銘打つて世に出たが、後者は葉氏が恒言より拔出した偽作らしく、更に繆氏刊本の影元抄本説も疑問であり、鄭振鐸は之を明の萬曆の頃に引下げて、清平山堂と三言の間に位置するものとしてゐる。^(三) 繆氏刊本は相當怪しいもので、鄭氏の他に長澤規矩也氏も影元人鈔本説を信ぜず、^(四) 宋元俗字譜を出した李家瑞はその字體を他の刻本と比較することにより、寧ろ明刻本に近いことを考證してゐるから、^(五) これは相當に時代を引下げて見なければならぬ。

戯曲の方では、葉恭綽により、倫敦で發見された永樂大典戲文三種によつて、南方系戯曲の祖である南戲の體例が明かになり、ついで諸種の詞・曲譜に散見する南戲佚文の搜集と復原工作が流行した。趙景深は南九宮譜・雍熙樂府等の書に於て五十種の殘存曲文を搜集し、^(六) 錢南揚は詞林摘艷・盛世新聲等より四六種を見出した。^(七) これによつて戲曲史はその源流の部に於て相當充實するのであるが、王國維も見るを得なかつた絳少雅の九宮正始が出て、^(八) 新に百十五種の佚文を附加するを得た。これは陸侃如・馮沅君によつて研究せられてゐる。

詞・曲譜中より佚文を搜集する工作は、早くは倉石博士の天寶諸宮調の復原がある。^(九) 元來支那では經書の佚文の搜

一橋論叢 第十三卷 第五號

集が盛んであつたので、その方法を戯曲にも應用したのである。

民國廿七年、支那事變の翌年突如上海に於て也是園舊藏古今雜劇が出現した。久しく行方を氣遣はれてゐた元明の雜劇が六十四冊、二百四十二種も出たのであるから、學界を驚喜せしめたのも無理はない。早速戰渦の間にもかゝらず、孫楷第の書誌的な研究が行はれたが、遂に此の資料による文學史的研究、其他は未だ出てゐないやうである。

(註一) 鄭振鐸 明清二代の平話集(中國文學論集)

(註二) 同

(註三) 京本通俗小説と清平山堂(東洋學報十七ノ二)

(註四) 李家瑞 從俗字的演變上證明京本通俗小説不是影元寫本(大公報圖書副刊八六)

(註五) 最近では全然繆氏の疑作かと疑はれてゐる。

(註六) 宋元戲文本事

(註七) 燕京學報專號六九宋元南戲百一錄

(註八) 燕京學報專號六十三、南戲拾遺導言參照

(註九) 青木博士の説(隨筆集・江南春)

(註一〇) 也是園舊藏古今雜劇(圖書季刊專刊第一種)

八

新資料が發現し、文獻の書誌學的研究や目錄學の類が盛んになるとともに、一方文學史の成立が要望される。何故

ならば、文獻の年代・作者・眞贋を考證し、或は本文批評や註釋を爲すにあたつて、先づ文獻の歴史的位づけが必要となる。何故なら諸種の基礎的作業が終了して、はじめて文學の理論的研究や歴史的研究が始まり、かくて文學史が完成されるのであるが、基礎的研究を開始する前に、素朴ながら文學の史的展開が理解されてゐなければならぬからである。

文獻の基礎的研究と文學史とは、並行しつゝ進行されるのであるが、戲曲史の方では、王國維の宋元戲曲史がある。上代より五代に至るまでの戲曲の萌芽時代より、宋の官本雜劇、金の院本に到つて、元人雜劇の體例がほぼ確立したものとし、元曲の盛衰・構成・文章を説き、南戲の勃興に及んでゐる。著者の博識が決定的にものを言つて、汎く資料を蒐集し、それを體系づけた劃期的な名著である。たゞ明清の部を缺いたまゝになつてゐたのは惜しむべきであるが、青木博士の支那近世戲曲史により、戲曲史は一應體を備へたわけである。青木博士は王國維の後に出了た永樂大典戲文の如き新しい資料により、南戲の項を充實せしめ、特に崑曲より皮黃劇への推移の項などは、支那の學界にも注目せられた。

小説史には周樹人（魯迅）の中國小説史略がある。民國四年に出たものゆゑ、其後の資料により改むべき點が少くないが、小説史は無數に出て、多く本書を精密にしたといふだけで、別に見るべきものはない。

胡適の口語文學史及び白話文學史は、文學革命を主唱して、口語文學にまで高めようとした著者の、政治的主張を裏づけんとする意圖に出たもので、特に後者の佛典翻譯文學や、白話詩の起源の項などに、獨創的な見解が多いが、口語文學の胚胎期たる唐代までであるのは惜しい。

近頃のものには、鄭振鐸の中國俗文學史がある。戯曲小説を除いた民間の俗曲・歌謡を中心とする文學史であつて、零細な資料をよく蒐集して、系統づけてゐる。

通觀的な文學史では同じく鄭氏の挿圖本中國文學史の右に出るものはない。商務印書館主の女婿たる著者は、資料の蒐集には、最も恵まれたる地位にある故に、新しい資料を出来るだけ網羅して、特に變文の項等は秀でてゐる。これも第五冊が事變にかゝつて出てゐない。

以上舉げた名書は、資料を中心として、其處に一應の關係を附したものであつて、何等かの問題をもつて體系づけられたものではない。文學史は文獻の基礎研究の間に、當面の要求を充足せしむる爲に要望されたのであつて、文獻の整理がもつと進展しなければ、理論的・體系的な文學史は生れないであらう。

たゞ最近單行された青木博士の支那文學思想史は、百尺竿頭一步を進めたものであつて、文學思想の二潮流として儒家思想と道家思想をあげ、時代的には上古より漢までは實用娛樂時代、中世（文朝より唐まで）は文藝至上時代、近世（宋より清まで）を倣古低徊時代として、思想史の方から支那文學の展變の跡をたどられようとしてゐる。

載道派と言志派の交替を以て、文學史を成立せしめようとしたものに、周作人の中國新文學的源流があるが、之は三千年の文學の歴史は、文學革命を終點とせる起伏なりとなす、胡適一派の政治的主張を反駁する爲に書かれたもので、民國の文學革命も、明末の公安派も、また元人雜劇も、もと／＼同じ思潮の頂點にすぎないので、文學思想の變遷を以て文學史を成立せしめんとする意圖も、政治的な胡適に對する、やはり政治的なゼスチュアーであつたわけである。

機械的に資料を並列して、文學史と稱し得た時代はもう過去のものであつて、向後は資料そのものを辨別する眼識よりも、資料の背後にあるもの、即ち文學を支へて流れるものに對する解釋が當然爲されなければならない。

九

新資料が発見される毎に學界は色めきたち、書誌學や目錄學、或は本文批評の如き基礎的研究が第一に試みられた。然し資料が一應出盡すと、書誌學者や目錄學者は手をつかねてゐなければならぬ。例へば孫楷第は中國通俗小説書目を出してしまふと、次には也是國舊藏元明雜劇の整理に着手した。これも一段落になると、書誌學者としての任務は、次の資料が出るまでは果されたわけである。^(一)日本では長澤規矩也氏がさうである。「書誌學」の同人として、内閣文庫藏本の調査や、元明戲曲資料の書誌的研究や、^(二)或は豊富な自家所藏善本の紹介等、^(三)書誌學者としては日支の學界に重きを爲したが、新しい資料が出なくなると、また用がなくなる。文學史も書かれた。^(四)然し前述せる如く資料の機械的排列に終らぬだけの、透徹せる史觀を持たなければ、鄭振鐸の挿圖本文學史にも及ばない。

この行づまりを打開する爲には結局方法論の問題が出て来る。^(五)即ち支那文學史研究法私説が之である。長澤氏の提示せる問題は第一に漢學的な方法と、西洋風な支那學的方法とがあるが、兩者とも行づまつたと感じる。結局支那文學研究には、獨自な方法を持たなければならない。第二に獨自な方法として、研究の對象は美的内容文辭の有無に従ふ。第三に扱方としては、書誌學的研究に續いて、各體の沿革を論すべきこと、更に次には各體の内容を觀察すべきこと。それは詩歌・戲曲・小説等別々に行はず、其間の共通内容を觀察すべきであると言ふ。之に對して吉川幸次郎

氏は、第一の問題は勿論賛成であるが、第二・第三には異議がある。対象を美的内容文辭の有無によつて定めんとするは、甚だ粗雑な定義の仕方である。支那文學の特質として文辭だけが問題になる。若し文辭が美的であれば、史記の如き歴史文であらうが、水經注の如き地理書であらうが、總て文學の対象とすべきである。支那文學研究は内容を研究するのではない。表現の技術的なもの、即ち文辭が如何に「美的」であり、乃至は「美的」であつたかを研究すればいい。又扱方に於ても文辭に對する扱方が少しも考慮せられてゐない處に不滿の意を表してゐる。

以上が殆ど論争らしい論争のない學界に、いくらか論争らしい句を見せたものであるが、長澤氏の方法論の提示は、政治的な効果を覗つて爲されたものであつて、他の領域から見れば、或は幼稚の誹を免れないかもしれない。一方表現の技術に就する吉川氏の所論は、最近の京都の傾向を最も強く反映するものである。

例へば世説新語の文章^(七)に於て、世説の文章が助字の使用を頻繁に繰返してゐるのは、前代には見られない此時代の特色である。それは助字を用ひることによつて、適當に言葉を言ひ淀ませて、四字六字の句を整へ、しかもその言ひ淀んだ個所に、哲學的な態度を暗示するやうなニュアンスを持たせたものである。支那文化の特質の一として、哲學は纏つた哲學説として記述される以外に、斷片的な言語のいひ廻しの中にも托し得るといふ思想があり、世説の助字の増加は、意識的に哲學を文章に象徵させようといふ動機から起つたものである。支那の文化事象のうち文章は最も重要なものの一つで、支那の文學史はある意味に於て文章史である。また文章を哲學の象徵として用ひる意識が認められる以上、文章は哲學史に於ても意味をもつものと思ふ。以上が吉川氏の見解の要旨であるが、確かに支那文學を考へる時に、此の問題は見逃すことの出来ない特質であることは、前述せる「文」の語源的成立から見ても理解

される。

また倉石博士は、もし言語の特質だけから定義を下すことができるならば、支那人とは一音節ごとに吐きだされる一の概念を一つの形に纏めてゆく種族である。故に支那文學とは、前の概念は後の概念を呼び起しつゝ進行しゆく概念と概念の音楽的連射である。然るに日本人は支那語を知らぬ癖に支那人の眞似をして、言語を賤み文字を貴ぼうとする。さうして支那人が誇とする漢字を己も十二分に操作してゐる様に誤信する。かうして支那學は文學といはず、史學といはず、經學といはず、垂死の狀態に陥つてゐると斷言する。

以上兩氏の所論は、支那學の研究は支那人と同じやうに正確に言語を操ることが前提となるものであり、かくてこそ文學の鑑賞も成立し、研究も透徹する。支那語によらざる限りは支那のものは絶対に理解されないとするのであり、此處から漢文教育を廢して支那語に置換せしめよとの主張も生れるわけである。

支那文學の研究が支那語の熟達を前提とすることは勿論のことであるが、之を單に文學のみならず支那學全般に及ぼさんとするところに、種々の問題があるけれど、今の所は纏つた反駁もあらはれてゐない。

要するに文辭だけが、支那文學の特質なのか、それとも他に色々な特質があり、それを明かにするのが目的なのか、此邊が見解の別れるところであらう。

同じ京都でも青木博士は、支那文學の理解と鑑賞、それは支那人に比して我等は話にならぬ、然り而して之と拮抗せんと欲するには、必ずや其の虚を突かねばならぬ。此に於て從來我國の支那學者が研究の歩を進めた徑路は、新しき體系による方法と、未開の分野を拓くことであつたと言はれる。

一橋論叢 第十三卷 第五號

文學研究の前提として支那語は勿論のことであるが、それだけが垂死の病人を救ふものとは思へない。新しき體系による方法と、未開の分野の開拓、確かに青木博士の言はれるが如く、研究法の善悪は其人の頭脳に係り、分野の開拓は其人の眼光にあるのであるから、要は廣く學問の方法について三思するところがなければ、此の行づまりは打開出来ないであらう。

(註一) 最近では文學史の方に目を向け、元明雜劇從唐宋影劇而出(輔仁學誌)は近來の傑作と言はれる。

(註二) 元明兩朝に於ける戲曲小説の書誌學的考察(漢學界雜誌四ノ二)

(註三) 家藏曲本目錄(書誌學八ノ三)

(註四) 支那學術文藝史、支那小説(共立社・漢學講座)

(註五) 漢學會雜誌(七ノ一)

(註六) 東方學報・書評(京都十ノ三)

(註七) 東方學報(京都十ノ二)

(註八) 漢字の特質と支那文學(漢學會雜誌・七ノ三)

(註九) 支那文學研究に於ける邦人の立場(昭和十二年六月 東京帝大新聞)

十

支那文學の研究とは、文學に見出される様々な文學的特質、それを貫く秩序や法則性を究明し、三千年に渉り、支那人が文學の世界に於て燃焼せしめた、民族の願ひを明かにすることである。その爲には第一に研究材料の蒐集整頓

が行はなければならない。大部分が書誌學の領域にあるものであるが、材料の選擇とか年代の推定とか言ふ時には、已に次の段階に屬する、解釋の問題と不可分の關係にあり、第一・第二の段階の間には明瞭な區分があるわけではない。第二には蒐集整頓された對象の究明であり、解釋の問題が重要な位置を占める。語の註釋・作者の研究・時代性の把握・傳統の解明等様々な問題が要求される。結局は文學性の究明を目的とするのであるが、その前に十分語義の研究が完了してゐなければならず、註釋の爲には作家の研究や時代性の把握がなされてゐなければならぬ。第三にさうした究明の結果、現實への新しい寄與の可能性の吟味、即ち價值評價が行はれ批評の問題が成立する筈である。

以上概觀せるが如く、支那文學は中華民國の成立とともに、支那的な文學の概念と其の研究法から脱却して、*sinological* 的なものが學界の主流を爲すに至つた。日本では狩野博士を先達とする京都學派を中心として、先づ第一の段階である書誌的研究が、次々に紹介される新資料の出現に従ひ盛行した。そして此の作業が一段落になると、方法論の反省が行はれた。然しそれは單に領域を失つた書誌學者の彷徨を示すものでしかなかつた。支那文學研究は次の解釋の段階を控えてゐる筈である。先づ京都の東方文化研究所經學文學研究室を中心として、完成せる尙書正義定本の方法を活用して、元曲選の語彙の蒐集と、それによる本格的な註釋の作業が進められ、其の報告が東方學報（京都）に見えてゐる。一方基礎的な註釋の進行とともに、元曲選の翻譯が吉川幸次郎氏によつて行はれ、また元曲の註釋を確實にする爲の作家の研究や時代性の究明としては、同じく吉川氏の元雜劇の作者があり、錄鬼簿其他當代の說部を蒐集して、あまり明かにされなかつた元人雜劇の作者の性格を、種々の角度から明かにしようと試みた。田中謙二氏の元雜劇の題材、同じく元曲に於ける險韻について、入矢義高氏の元曲助字雜考等は、すべて元曲選の註釋事業

を支へる爲に、或はかゝる工作の副産物としてあらはれて来るものがある。

かうして支那文學の傳統的性格、或は其の言語との連關に於ける特質などが問題になつて來ると、前者には吉川幸次郎氏の俗の歴史がある。支那に於て戯曲・小説の如き文學が賤しめられたのは、それが通俗であつたからである。然し俗の概念は、先秦に於ては、雅に對するの俗であり、高い價值を許されるものではなかつたが、六朝の頃には反對の現象が起つて、世説の如き俗語を混じた文體が成立し、唐宋以後は再び古の傳統に従ふのであるとした。また支那に於ける古代尊重の思想が、支那の思想文學の著しい特質を形成してゐることを指摘する等、最近に於ける吉川氏の活躍は目覺しいものがある。

言語との連關を考へる時には、支那語の語學的研究が先行しなければならない。此方面は倉石博士の主唱されるところ、その指導下にある、大坂外語大陸語學研究所の活動に、今後の希望をもつものである。

東京は書誌的段階より、解釋の段階に中心が移つてからは、全く京都に壓倒されてしまつた觀があるのも、解釋の前提である支那語學の領域に疎かであつたからで、最近倉石博士が兩大學の間を往來して、此方面の擴充につとめられてゐるのは、斯學の爲に慶賀すべきであらう。

(註一) 讀元曲選記。

(註二) 金錢記。

(註三) 東方學報(京都十三ノ三・四)

(註四) 東方學報(京都十三ノ四)

(註五) 同(十二ノ二)

(註六) 同(十四ノ一)

(註七) 同(十二ノ四)

(註八) 支那學(小島・本田兩博士還曆紀念號)